

中  
2019

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で21ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

(第1回)

受験番号	
氏	名
	ふりがな



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今朝からずっと——ほんとうのことを言えば、二日前に祖父が亡くなってからずっと、家のどこにいればいいのかわからずにいた。

二階の自分の部屋は、親戚せきの着替えのための部屋になった。一階の部屋の襖ふすまはあらかたはずされ、玄関の引き戸もさつきはずされた。通りに面した窓は白と黒の幕で覆おおわれ、幕の前には花環はなわがたくさん並べられた。台所には町内会のおばさんたちが出たり入ったりして、母の姿を探すだけでも大変だった。

「邪魔じゃまになるけん、外で遊んどりんさい」と母に言われ、家の前でサッカーボールを蹴くっていたら、目を真っ赤に泣き腫はらした叔母おばに「<sup>①</sup>こげな日ひにふらふら遊んどつたらバチが当たるよ」と叱しかられた。しかたなく家に入ってテレビを点つけると別の叔母に「音を出したらいけんよ」と言われ、マンガを読んでいたら漁協の組合長が「おじいちゃんのそばにおつてあげんさい」と酒に酔よった声で言つて、そのくせ祭壇まつ壇の設もけられた広間ひろまに行つてみると、おとなたちが集まつていて、座る場所などどこにもなかった。

おじいちゃんが死んだ。

それは、わかる。

ずっと一緒に暮らしていた祖父だ。かわいがつてもらつていた。「中学生になったら、おじいちゃんの船で漁いしに連れて行つてやるけん」と口癖くちくせのように言つていた祖父が、脳溢血のういつけつで、お別れの言葉を交まわす間もなく死んでしまった。

おじいちゃんが死んだのは悲しいことだ。

それも、わかる。

悲しいときには、泣いてしまう。

それだって、ちゃんとわかっている。

なのに、涙が出てこない。② 悲しいかどうかもはっきりしない。自分の居場所を見つけれないと、ゆっくり悲しむこともできないのかもしれない。

父に案内されて祭壇さいだんの前に座った客は、ていねいなしぐさで合掌と焼香をした。父以外の誰とも知り合いではないのか、広間ひろまにいるひとたちは皆、③ げんそうげんそうな顔で客の背中をちらちら見ていた。客のほうも、焼香を終えたあとは広間ひろまにいる理由をなくしてしまったように、どこか居心地悪そうだった。

客は、今夜の泊まり先に、町内の民宿を予約していた。父は「ウチに泊まってもろうてもよかったのに」と少し残念そうに言つて、戸口の脇に立ったままだった少年を呼んだ。

「おじちゃんを『みちしお荘』まで案内しちゃつてくれや」

「……うん」

「ほいで、どうせおまえはここにいても邪魔になるだけじゃけえ、お通夜が始まるまでおじちゃんのお世話して、町の案内でもさせてもらえや」

母につづいて父にも「邪魔」だと言われたのは悲しかったが、とりあえず道案内と客のお世話という仕事を与えられてほっとした。

客が玄関で靴を履はいているとき、父は初めて「ほな、シライさん、またあとで」と客を名前で呼んだ。客も「ハジメさんも、あまり無理して疲れを出さないようにしてください」と応こたえた。ハジメというのが父の名前だ。漢字で「一」と書く。

「お待たせ」

シライさんは玄関の外で待っていた少年に声をかけ、大きなバッグを肩に提<sup>さ</sup>げて歩きだした。礼服姿にはあまり似合わない、リュックサックのようなバッグだった。

少年の家から『みちしお荘』までは、海に沿った一本道だった。夕方の風<sup>なま</sup>の時間にさしかかって、風が止まり、よどんだ潮のにおいが濃くなっている。

「二人まとめて<sup>④</sup>厄介<sup>い</sup>払い<sup>い</sup>されちゃったな」

シライさんはそう言っただけで笑った。ヤツカイバライの意味はよくわからなかったが、なんとなくシライさんがかけてみることにした。

「お父ちゃんと知り合いですか？」

「ああ。お父さんとも、亡くなったおじいさんとも知り合いだったんだ」

「漁に出てたんですか？」

「いや、そうじゃなくて……」

シライさんは歩きながらバッグの腹を軽く叩<sup>たた</sup>いた。「取材をしたんだ、おじいさんの」——シライさんは旅行雑誌の記者で、十二年前に祖父をグラビアページで紹介したのだという。

「見たこと、あります、それ」

「そうか。おじいさん、カッコよかったです」

少年は、こくん、とうなずいた。祖父をほめられてうれしかったのが半分、残り半分は、<sup>⑤</sup>シライさんの話にうまくついていけたことで、うれしいというより、ほっとした。

祖父は地元で一番の腕を持つ一本釣りの漁師だった。いまの、この季節——春先には鯛<sup>た</sup>を狙う。夜明け前に港

を出て、まだ陽の高いうちに一日の仕事は終わる。

「その頃はまだ、お父さんは見習いみたいなもので、おじいさんの船に乗って、しょっちゅう叱られてたんだ。髪もいまみたいな角刈りじゃなくて、リーゼントで……リーゼントって、わかるかな？」

⑥ ほんとうはよくわからない。わからなくてもいいや、と思った。自分が生まれる前の父の姿はアルバムの古い写真で何度か見たことはあっても、こんなふうに誰かから話を聞くのは初めてだった。

シライさんは「あとで写真見せてやるよ」と笑った。「たくさん持ってきてるんだ」

少年は少し足を速めた。お父さんの知らないところで、お父さんの昔の写真を見て、お父さんの昔の話を聞く——というのが、いい。買ってきたばかりのマンガを開くときのように、胸がどきどきして、わくわくする。

『みちしお荘』は、船だまりのすぐ前にあつた。古びた漁船が二十隻近く並んだなかに祖父の船もある。ひときわ古い。少年が中学校に上がったら船を新調しようかと話していて、それっきりになつてしまった。

シライさんは宿帳に名前を書いたあと、部屋には入らずに、一階の食堂に少年を誘つた。

「ジュース飲むか？」

「……はい」

「じゃあ、ジュースと、ビール」

注文を取つた『みちしお荘』のおかみさんは、少年を見て「おじいちゃんも急なことじゃつたなあ」と寂しそうな顔になり、頭を撫でてくれた。

ビールとジュース、それに「サービスです」と茹でたイカの小鉢がテーブルに並んだ。この地方でベイカと呼ぶ、春が旬の小さなイカだ。酢味噌で食べると、酸っぱさの奥でじんわりと甘みがにじむ。

「ひとが亡くなつたときには乾杯っていわないんだ。献杯っていうんだ」

ケンパイ。また知らない言葉が出てきた。ふだんなら、家に帰って母に訊けば、すぐに漢字を教えてくれる。でも、今夜はたぶんそんなことを話しかける余裕はないだろう。

ビールとジュースのコップを軽くぶつけてケンパイすると、シライさんはビールを一口飲んで、ふうう、と声に出して息をついた。

「写真、見せてやるよ」

床に置いたバッグのファスナーを開け、中から分厚くふくらんだ封筒を取り出した。

「これ、ぜんぶ写真なんですか？」

「ああ、ぜんぶ、おじいさんとお父さんの写真だよ」

ほら、これ、とシライさんは封筒から出した写真を何枚かまとめて少年に渡した。

祖父と父がいた。船に乗っていた。二人ともいまよりずっと若い。父はまだ二十歳はたちそこそこで、祖父も還暦かんれき前だった。

はげていない頃の写真を見せたらおじいちゃんは恥ずかしがるだろうか、とクスツと笑いかけて、ああそうかと頬ほおをすぼめた。もうおじいちゃんと話すことはできないんだな。おとといから何度も思ってきたことなのに、いま初めて、それが悲しさと結びついた。

漁をしているときの祖父の写真は、どれもタオルを頭に巻いていた。いつもだ。昔から変わらない。最後の漁に出たおとといもそうだった。出かける前に庭のほうに回る。漁の道具をしまった納屋なやの脇に、針金を渡した物干し台がある。昨日のうちに干しておいたタオルをそこから取って、キュツと頭に巻きつけて、「ほな行ってくるけん」と港へ向かう。漁を終え、魚市場に魚を卸おろし、仲間と軽く一杯やってから家に帰ってくると、「頭からはずしたタオルを水洗いして、物干し台の針金に掛ける。ずっとそうだった。毎日毎日、それを繰り返していた。

「ほら、この頃はまだお父さんの雰囲気、あんまり漁師らしくないだろ」

「……はい」

「漁師を継ぐのは嫌だ嫌だって、俺と酒を飲むと文句ばかり言ってたんだ」

「そうなんですか？」

「いまは、生まれついで漁師です、って顔してるけどな」

シライさんはおかしそうに笑った。

グラビアの撮影の仕事は一週間ほどだったが、家に泊まり込んでの取材をつづけたおかげで、祖父や父とすっかり仲良くなった。

「仲良くなったっていつても、俺は東京だから、年賀状のやり取りぐらいしかできなくて、おじいさんが生きているうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……でも、昨日ハジメさんから連絡もらってうれしかったし、けっこうスケジュールはキツかったんだけど、ボクに会えたから、やつぱり来てよかったなあ、って」

シライさんはバッグから別の封筒を取り出して、中に入っていた葉書を「特別に見せてやるよ」と少年の前に置いた。

年賀状だった。差出人は祖父。印刷された文面の横に、手書きの一文が添えられていた。

〈<sup>⑧</sup>愚息もようやく一丁前になり、孫もこの四月で六年生です。三代で船に乗れたら嬉しいことです〉

祖父の字だ。間違いない、これはおじいちゃんの字だった。

「ボクは大きくなったら、なにになりたいんだ？」

照れくさかったが、正直に「Ｊリーガー」と答えた。シライさんは「そうか、じゃあもつとたくさん食べて、もつと大きくならないとな」と笑ってくれた。



陽が落ちてから、少年はシライさんと二人で家に戻った。

シライさんはお通夜の焼香を終えると、広間で親戚や町のひとたちと酒を飲みはじめた。シライさんの持ってきた祖父や父の若い頃の写真は、みんなの思い出話の肴さかなになっているようだった。

少年は、また（ 1 ）をなくしてしまい、外に出てそつとサッカーボールを蹴けったり、台所を覗のぞいたり、階段の踊り場に座ってマンガを読んだりして暇ひまをつぶした。『みちしお荘』にいた頃はあんなに仲良しだったシライさんが、家に着くとあつさりとおとなの仲間に入ってしまったのが、ちよつと悔しかった。

台所の前を通りかかったとき、叔母さんたちの話し声が聞こえた。祖父のなきがらを清めているときの話だった。首筋の皺しわをタオルで拭いていたら、潮と、魚と、それから錆さびのにおいがたちのぼってきたのだという。「何十年も船に乗ってきたんじゃけん、体に染みついとるんじゃろうねえ」と叔母さんが言うと、母が「お義父ととさんは風呂が嫌いじゃったけんねえ」と返し、みんなで懐かしそうに笑っていた。

おとといまではこの家にいたひとのことを、もうみんなは思い出話にしてしゃべっている。

⑨ 急に寂しくなった。涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。

玄関からまた外に出て、庭のほうに回った。

納屋の脇に、ほの白いものが見えた。

祖父のタオルだった。

手を伸ばしかけたが、触るのがなんとなく怖くて、中途半端な位置に手を持ち上げたまま、しばらくタオルを見つめた。

「おう、ここにおったんか」

背中をかけられ、振り向くと、父とシライさんがいた。

「おじいちゃんの写真、シライさんに見せてもろうとつたら、面白かったんじや。おじいちゃんは漁に出るときはいつもタオルを巻いとつたろう。じゃけん、家におるときの写真を見たら、おまえ、みーんなデコのところが白うなつとるんよ。そこだけ陽に灼けとらんけん……」

父はかなり酔っているのか、<sup>※1</sup>呂律の怪しい声で言つて、体を揺すつて笑つた。

「ほいで、いままそうなんじやろうか思うて棺桶を覗いてみたら、やつぱりデコが白いんよ。じゃけん、のう、シライさん、じいさんをええ男にして冥土に送つてやらんといけんものう……」

涙声になつてきた父の言葉を引き取つて、シライさんが「タオルを取りに来たんだ」と言つた。「やつぱり、タオルがないとおじいちゃんじゃないから」

父は涙ぐみながら針金からタオルをはずし、少年に「せつかくじゃけん、おまえも頭に巻いてみいや」と言つた。シライさんも「そうだな、写真撮つてやるよ」とカメラをかまえた。

少年はタオルをねじつて細くした——いつも祖父がそうしていたように。

額にきつく巻き付けた。

水道の水で濯ぎきれなかつた潮のにおいが<sup>⑩</sup>鼻をくすぐつた。おじいちゃんのおいだ、と思つた。

「おう、よう似合うとるど」

父は拍手をして、そのままうつむき、太い腕で目元をこすつた。

シライさんがカメラのフラッシュを焚いた。まぶしさに目を細め、またたくと、熱いものがまぶたからあふれ出た。かすかな（2）は、そこにもあつた。

（重松清『タオル』）

※1 呂律の怪しい：舌がよく動かさず言うことがわからない

※2 冥土：死んだ人の靈魂れいこんが行くところ

問一 — 部①「こげな日に」とは「このような日に」という意味だが、どのような日のことを言っているのか。

本文中より三字で抜き出しなさい。

問二 — 部②「悲しいかどうかもはっきりしない」について、少年がこの後、「悲しさ」を最初に実感するのは、

どう思った時か。文中よりもっともふさわしい一文をさがし、その最初の五字で答えなさい。

(句読点は一字とする)

問三 — 部③・④・⑦・⑩のこの文章での意味としてもっともふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で

答えなさい。

③ げん

ア 焦って周囲のことがまったくわからなくなること

イ いらいらして、人に当たりたくなること

ウ 頭の毛が抜けて減っていくほどに驚くこと

エ 理由や事情がわからなくて、不思議に思うこと

④ 厄介払い

- ア 面倒な人を追いはらうこと
- イ 悪い人を払いのけること
- ウ 世話する人をこばむこと
- エ 身内の人のお祓いはらいをする事

⑦ 還暦

- ア 四十歳のこと
- イ 五十歳のこと
- ウ 六十歳のこと
- エ 七十歳のこと

⑩ 鼻をくすぐった

- ア 海で遊びたくなるようにしてくれた。
- イ とても嫌なにおいを感じさせた。
- ウ 心地よい香りを与えてくれた。
- エ むずがゆくなりくしゃみを出させた。

問四

【 X 】に入る少年の想像の言葉としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「亡くなってつらいな」

イ 「俺たちは同じだな」

ウ「早く家に戻りたいな」

エ「しかし頭にくるな」

問五

——部⑤「シライさんの話にうまくついていけたことで、うれしいというより、ほっとした。」のはなぜか、

①ここから読み取れるこの時の少年の気持ちとしてもつともふさわしいものを次から選り記号で答えなさい。

②また、この時とほぼ同じように安心した気持ちになった場面を、本文中から一文でさがし、最初の五字で答えなさい。(句読点は一字とする)

ア 祖父のカッコよさが雑誌の写真を通して再確認できた喜びとともに、この旅行雑誌の取材の話が終われば早く宿に着き、シライさんのおごりで、自分の大好きなジュースを飲めると思ったから。

イ かつての祖父の取材の話を聞いていく中で、旅行雑誌の内容についてシライさんが話されている内容をあまり理解できず、子どもあつかいされ、少し馬鹿にされていた感じがあつたのを見返すことができたから。

ウ 十二年前にグラビアページで紹介してくれたシライさんに祖父のことをほめられ、とてもうれしかったのは事実だが、それよりも、優秀なシライさんの話を理解でき能力を認められたことで自分のプライドを守れたから。

エ 家族や親族から邪魔者扱いされていた自分に、今、シライさんだけは、同じ気持ちを理解してくれる人だと感じ、話についていけることは、今の自分の存在を認めてくれている人がいることになるから。

問六 — 部⑥「ほんとうはよくわからない。わからなくてもいいや、と思った。」から、少年は、その言葉がわ

からなくても関係なく、何に喜びを（どんなことがいいと）感じているのか。少年の気持ちを含めた連続する二文を文中からさがし、最初と最後の五字で答えなさい。（句読点は一字とする）

問七 — 部⑧「愚息（ぐそく）」とは誰のことか。次から選び、記号で答えなさい。

ア 少年                   イ 少年の父                   ウ シライさん                   エ 祖父自身

問八 本文中の（ 1 ）に入る三字と（ 2 ）に入る五字を文中からさがし、答えなさい。

（1）は漢字三字で答えること

問九 — 部⑨「急に寂しくなった。涙は出なくても、だんだん悲しくなってきた。」について、少年のこの時の

心情（気持ち）としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア この家のために毎日一生懸命漁を行い仕事をして生きてきた祖父が亡くなってすぐに家族のみんながあっさりとして過去の人として思い出話をされ、自分自身の中に何という冷たい家族や親族なのだろうという思いがこみあげてきて、とても悔しくてどうにもならなくなってきた気持ち。

イ シライさんが広間で親戚の人たちと祖父や父の若い頃の写真を見せ始めた時、今まで自分と近い距離でいたシライさんが、急にまた、家族や親戚の仲間に入って、自分のことをすっかり忘れてしまった

ように思われ、一人ぼっちになったようなたとえようのない寂しさが襲いかかってきた気持ち。

ウ 家族から少し距離を感じていた自分だが、家族や親族の人たちが亡くなった祖父を目の前に、生きていた時の話を懐かしそうに語っていたのを聞いていると、そこに一緒に住んでいた自分の気持ちが少しずつ家族の中に入り込み、過去の人になってしまった祖父への思いが募っていった気持ち。

エ 祖父のなきがらをタオルで拭いて清めてくれながら、こんなに祖父のことをたくさん話してくれている家族や親戚、そしてシライさんが、さらに暖かく深い愛情を自分に注いでくれていることに対して、さつきまで幼い子供のような行動をしてきた自分自身が情けなくなってきた気持ち。

問十

次の生徒A～Hの文章は、クラスのグループ八人でこの作品の内容について話をしたものです。本文の内容としてふさわしくないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

生徒A 祖父は、漁師を継ぐことに対して、ハジメと少年と三代にわたって漁師になることを願っていたみたいだ。

生徒B 少年は、父に頼まれて客人のシライさんを『みちしお荘』まで話をしながら町内を一緒に歩いたんだ。

生徒C 少年は父親に祖父の使っていたタオルを巻くように勧められた時、なんとなく触るのが怖くなっていたよね。

生徒D 父は、祖父がそうしたように少年が、タオルをねじって細くし、額に巻くのを見て喜び涙ぐんだ。

生徒E 父は、漁に出るとき祖父がいつも使っていたタオルを、最後の別れで祖父の頭に巻いてやろうとしたよね。

生徒F シライさんは、父が祖父の死を連絡してくれたことに感謝し、ここに来たことに後悔はなかったようだね。

生徒G シライさんは、祖父へ最後に出した一番大切な手書きの年賀状を、少年にだけ特別に見せてくれたよね。

生徒H 祖父の船は、『みちしお荘』の前の古びた二十隻近く並んだ船だまりのなかに、そのまま置いてあったんだよ。



二 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

水は つかめません

水は すくうのです

指をびったりつけて

そおっと ①大切に――

水は つかめません

水は つつむのです

二つの手の中に

そおっと ②大切に――

水のころも

人のころも

(高田敏子「水のころ」)

問一 この詩の形式はなにか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文語定型詩    イ 口語定型詩    ウ 文語自由詩    エ 口語自由詩

問二 この詩は、三つの部分からなっている。詩を構成する部分(数行のかたまり)を何というか、漢字一字で答えなさい。

問三 この詩の表現上の特徴として指摘できないものは何か、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 省略法……文の一部分を書かずに簡潔に味わい深く表現している。  
イ 列挙(れつきよ)法……関連する語句や事柄を並べて表現している。  
ウ 擬人(ぎじん)法……人間でないものをまるで人間であるかのように表現している。  
エ 反復法……同じ語句を繰り返し使用して表現している。

問四 —部①②「大切に—」のそれぞれの—は、どんな言葉と入れ換わると思われるか、それぞれ六字で記しなさい。

問五

この詩を読んだ小学生たちが、この詩について話し合いをしています。この詩をもっともよく理解していると思われる人はだれですか、記号（A～D）で答えなさい。

生徒A 「すくう」のは、水のころではなく、人のころではないかな。人のころは、優しくすくいとつて、つつみこむことで水のように透明になると思うよ。

生徒B たしかに水のように形のないものは、直接つかむことはできない。だから大切にすくったり、つつんだりすることが必要だ。それは人のころも同じだということだね。

生徒C 水のころを救い出したり、包み込んだりするために、人はいろいろな工夫をしなければならぬことがよく分かった。そういう心構えが大切なんだね。

生徒D でも、やはり水のころはつかめないということは、人のころもつかめないということでしょう。どちらも大切にしようという作者の気持ちは伝わっていると思うよ。

三 次の短歌と俳句を読んで、後の問いに答えなさい。

A たちはむれに母を背負ひて

そのあまり軽きに泣きて

三歩あゆまず

石川啄木

B 春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

持統天皇

C 草臥れて宿かるころや藤の花

松尾芭蕉

D ピストルがプールの硬き面にひびき

山口誓子

問一 Aの歌の――部「その」は「それが」という意味だが、ここでの「それ」とは、何を指しているか、もつ

ともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ふぎけてお母さんを背負ったこと      イ ふぎけて背負ったお母さんの体

ウ ふぎけてお母さんを背負った自分      エ お母さんとふぎけあつた思い出

問二 Bの歌で作者が表現したかったことは何か、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 香具山に干された真つ白な着物を見て感じ取った季節の変化。
- イ 季節が変わっても続く香具山で暮らす人々の生活の豊かさ。
- ウ 春から夏への季節の変わり目でひとときわ目立つ香具山の美しさ。
- エ 香具山の季節が変わっても人々の生活に保たれている平和。

問三 Cの句の——部「や」の表現を何というか、三字で答えなさい。

問四 Dの句の季語を抜き出しなさい。

問五 AからDを古い時代順に並べるとどれになるか、次から選び、記号で答えなさい。

- ア A↓B↓C↓D
- イ C↓D↓B↓A
- ウ C↓B↓A↓D
- エ B↓C↓A↓D

**四** 次の各文の——部の敬語表現について、適当な表現に直しなさい。

①私の父が今後ともよろしくとおっしゃっていました。

②母の手料理ですが、どうぞ遠慮なさらずにいただいでください。

五 次の①②の文の空欄にもっともふさわしい語句を後から選び、記号で答えなさい。

① 暑い時期の生物は（ ）ので気をつけなさい。

② 乗っていた飛行機が急降下を始めたので、（ ）ことになった。

- |   |        |   |       |   |            |
|---|--------|---|-------|---|------------|
| ア | 足が早い   | イ | 手を打つ  | ウ | 目からうろこが落ちる |
| エ | 首が回らない | オ | 肝を冷やす | カ | のどから手が出る   |

六 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 隣の家には、たいへん仲の良いシマイが住んでいる。

② 次のキャプテンは、レキセンの強者だという評判だ。

③ 貴重な文化財が火事でゼンショウしてしまった。

④ どんな勇者にもひとときのキュウソクは必要であろう。

⑤ 選挙の結果は、タイシユウにうける宣伝文句で決まる。

七 次の——部の漢字の読みをひらがなで記しなさい。

- ① 彼の実家は、江戸時代から続く和菓子屋を営んでいる。
- ② その店は、ガイドブックにもっている和菓子を商う。
- ③ 弟子たちは、たしかな技術を身につけるために修行に何年も費やす。
- ④ 弟子たちの中からは、次代を担う優れた職人も出てきた。
- ⑤ 立派な後継者もでき、店主はそろそろ潮時と引退を決めた。

